

V・E・フランクルの「意味への意志」に関する一考察

教育学研究科生涯教育専攻 博士後期課程1回生 喜多佳子

はじめに

豊かな今日、多くの人々は生きる手立て（ミーンズ）を手に入れた。しかし、何のために生きるのかという意味（ミーニング）まで手に入れたわけではない。つまり、苦悩する人（ホモ・パティエンス）充足と失敗と人類（ホモ・サピエンス）が歩む成功と失敗との間には、この生きる手立て（ミーンズ）は手に入れることができても、その何のために生きるのかという意味（ミーニング）を手に入れることができないならば、生きている意味の虚しさが人間を死に追いやると考える。このミーニングこそが「生きる力」へととなり得るのである。

「生きること」は、すなわち「死ぬこと」でもある。つまり、毎日毎日、自分に与えられた「生きること」への責任と義務を果たすことで「死」を全うし、意味ある人生にしなければならない。『イワン・イリッチの死』の主人公にもみることができる⁽¹⁾。

フランクル（Viktor Emil Frankl, 1905－1997）は、フロイト（Sigmund Freud, 1856－1939）によって主張された「快楽への意志」やアドラー（Alfred Adler, 1870－1937）の言う「力への意志」が人間には存在しないと言おうとしているのではない。ただそれらは、人間にとって最も根本的な意志ではなく、「意味への意志」（自分の人生をできるだけ意味のある人生にしたいという欲求）こそが、それであると言おうとしているのである。この人間の精神医学

的規定をフランクルに確信させたものは、彼の強制収容所体験であった。ナチスの強制収容所という「限界状況」において人間を最後のところで支えたものは「快楽への意志」や「力への意志」ではなく、「意味への意志」であった⁽²⁾。

毎年、増え続ける自殺の原因は色々あろうが、それらはすべてにおいて、その人間の人生の目的（意味）喪失からくるものと思われる。現状からの逃避、「死」をコペルニクスの転換でもって「生」へ移行する力はすべての人間も持っているものであるとフランクルは唱える。フランクルは自身の経験でもって人間の本質を証明した。我々は、意識的にせよ、無意識的にせよ、つねに人生の目的（意味）を求めて生きているのである。

本稿では、このような人間だけにしか与えられていない問題についてフランクルを通して探ってみたい。

第1章 フランクルの人間形成の基礎

第1節 フランクルの両親

フランクルを知ろうとすれば、まず彼の両親を知らなければならない。なぜなら、彼が両親のどのような性格を受け継ぎ、また、どのような環境のもとで成長したのかをみる必要があるからである⁽³⁾。

フランクルの父、ガブリエルはウィーンから北に80キロメートルほど離れた、ブリュン街道

沿いのポールリツ（現在のチェコ共和国ポホジェリツェ）という村の出身である。貧しい製本工の息子であった彼は、飢えに耐えながら医学部の勉学を規定学期数終了まで修めながら、経済的な理由からその道を断念し、国家公務員になった。そして社会行政省に入省して部長にまで昇進した。

しばらくの間、ガブリエルは児童保護・青少年福祉省のヨゼフ・マリア・フォン・ベルンライター大臣⁽⁴⁾の個人秘書を務めていた。当時この大臣は行刑（刑の執行）改革やアメリカでの個人的経験を綴った本を書いていた。彼のボヘミアの邸宅や城で、以前10年間国会の速記者を務めたことのあるガブリエルが口述筆記で本の原稿を書き止めた。あるとき、食事に誘われても彼は必ず断るので、気になった大臣がなぜかと問うた。すると彼は、ユダヤ教に則った食事しか取らないからだと言明した。それ以来、ベルンライター大臣は御者に命じて毎日2回、近くの町までユダヤの掟にかなった食事を取りに行かせ、彼はパンとチーズだけの生活から解放されたのだった。また、あるとき、当時働いていた省内で会議の速記を彼に命じた局長がいた。ガブリエルは、その日がユダヤの大祭日「ヨム＝キプル（贖罪日）」であることを理由に拒否した（このような正義の父親像がフランクルに受け継がれている）。その日は24時間断食し、祈祷し、もちろん仕事もしてはならないのである。局長は、懲罰委員会にかけると脅した。それでも彼はユダヤの祭日に働くことを拒否したため、実際に懲戒処分を受けることになった。

このようにフランクルの父、ガブリエルは信心深い人であった。また、性格的にも人生に対してスパルタ的な、厳格な考えをもち、義務についても同様の考えをもっていた。自らの信条をもち、かつそれに忠実であった。このような父によって躰けられたフランクル自身も完全主義者である。ガブリエルの人生観は、スパルタ

的であったばかりでなく、ストイックでもあった。その上、父は「カンシャク持ち」ですらあった。しかし、フランクルは常に父ガブリエルのことを「正義の人」とみていたようだ⁽⁵⁾。それは、絶えず外から子どもたちを見守ってくれているという安心感を与えていたからである。そして、正義こそ父ガブリエルの特徴だったのである。彼の正義感は、しかし、神の義への信仰に基づいていた。そうでなければ、ガブリエルの座右の銘である「神の御心のままに、私は耐える」という言葉は考えられなかったであろう⁽⁶⁾。

フランクルの母エルザが生まれたのは、ブラハのワイン造りが盛んな地区で、現在は外国の大使館が立ち並んでいる所である。

エルザはブラハの由緒正しい名門の出で、ブラハ出身のドイツ詩人オスカー・ヴィナー⁽⁷⁾（グスタフ・マリックス⁽⁸⁾の小説『ゴーレム』に描かれている）は彼女の伯父に当たる。フランクルが彼に会ったとき、彼はすでに失明しており、テレージエンシュタットの収容所で亡くなる直前であった。さらに母エルザは12世紀に活躍したラシ⁽⁹⁾の末裔であり、また同時に「マハラール⁽¹⁰⁾」、すなわち有名なブラハの「ラビ・レーヴ」の子孫でもあった。これらはフランクルが一度目にする機会があった家系図のよるものである。それゆえ、男性中心の世界にあって女性にはあまり注意が払われなかったとみえて、エルザのことはそれほど分かっていない。しかし、母エルザは当時の伝統的な母親であり、主婦だった。子どもたちが立派に育ち、家族が情緒的に安定していたのは、この心優しい、温かい、信心深い、有能な母親のおかげだといえるだろう。

第2節 幼少期のフランクル

フランクルが生まれた当時のウィーンは、まだ、栄華の最中にあった。

フランクル家の3人の子どもたちは、全員ユダヤ人が多く住むウィーン2区、ドナウ河に面したチェルニン通りの6番地、有名なプラーター公園に通じていた狭いアパートで生まれた。長男のヴァルター・アウグストは、2番目の子どもであるヴィクトールが生まれたとき、2歳半だった。母エルザは二人目の息子をヴィクトール・エミールと命名した。1905年3月26日のことである。家族は彼を「ヴィッキー」と呼んだ。

非常に質素なフランクル一家のアパートは、二部屋のほかにはキッチンと玄関があるだけで、ベッドルームにある食卓で一家は食事をした。ヴィクトールが生まれてから4年後、妹ステラ・ヨゼフィーナが誕生した。この5人の家族のほかに、手伝いの少女が数年間住み込んでいたが、当時はそれほど豊かではない世帯でも、こうしたことがよくあった。貧しい移民の少女たちは、家事を手伝うのと引き替えに、寝る空間と食事を与えられた。

一家の生活はガブリエルの給料で支えられていた。ガブリエルは、君主制に仕えて安定した収入を得ていた。子どもたちが生まれた頃のガブリエルには「それほど多くはないけれど手堅い」収入があったのである⁽¹¹⁾。

3歳のとき、息子のヴィッキーが、大きくなったらお医者さんになりたい、海軍のお医者さんになるのだと言ったときのガブリエルの喜びは一入であった⁽¹²⁾。前述のごとく、その昔、父ガブリエルは経済的な理由で医学校の退学を余儀なくされていた。すでに5年間の課程を修了し、リゴロズムと呼ばれる一連の総合試験を残すだけだったという。それを考えると自分の果たせなかった夢を息子のヴィクトールに託す思いが湧き上がってきたのも当然のことであつたらう。

また、フランクルが4歳のときのある晩、眠りに入る直前にハッと飛び起きたことがあるという。自分もいつかは死なねばならないと気づ

いたからである。しかし、彼を苦しめたのは、死への恐怖ではなく、むしろただ一つ、人生の無常さが人生の意味を無に帰してしまうのではないかという問いだったのである。そして、その問いに対して彼が最終的に到達できた答えは、様々な観点からみて、死こそが初めて人生を有意義なものにするということであった。たった4歳の子どもが人生の意味についての疑問をもつということからして、すでに天才的片鱗をみせつけていた。ヴィッキーは虚弱なたちで、結果を競う遊びよりも自分の思いつきを話すことの方が好きであった⁽¹³⁾。

ヴィッキーは、近所に買い物に行く母親とよく一緒に出かけた。そして、色々質問するが、彼女に説明するいとまも与えず、ヴィッキーは自分で答えた。彼の想像力はすでにそのときから人生の意味と目的に及んでいたのである⁽¹⁴⁾。子ども時代に自分を包んでくれた安心感と満足感は差別によって少しも損なわれていないと、後年のフランクルは強調している。それは自分の生活環境から贈られたものだったのである。

両親と親しかった女性教師は彼のことを「思想家」と呼ぶほど、彼女に質問していた。しかし、彼自身は何か知ろうという気持ちが大きかったようで、むしろ、最後まで考えぬく人間であったといえるかもしれないと言っている⁽¹⁵⁾。

また、権力や名声に対して何の興味ももっていない彼の性格を表す次のような文章がある。「私は、とっくに持っていたアイデアを他の人がずっと後で思いついたことに気づくと、いつも悦に入った気分になった。別にそのために嫌な気分になることもなかった。なぜなら、苦勞して何かを出版することによって有名になったその人と同じことを、自分は別に苦もなく考えついていたのだと思ったからである。実際、たとえ私のアイデアで誰かがノーベル賞をもらおうようなことがあったとしても、私には別にどうということもない」⁽¹⁶⁾。

フランクル家の3人の子どもたち、ヴォルター、ヴィクトール、ステラは、順繰りに近所の小学校へ入学した。妹ステラだけは違うギムナジウムに通ったが、ヴォルターとヴィクトールは同じシュベル・ギムナジウムに入学した。かつてフロイト、父親のガブリエル、そして、アドラーが通ったのと同じギムナジウムである。フロイトとガブリエルはシュベル・ギムナジウムの在学期間が2、3年ほど重複している。当時の教師は、同じ職に何10年もとどまっていたから、フロイト、ガブリエル・フランクル、アドラーが同じ教師に習った可能性は大きい。この校舎は現在も当時の面影を残している。

ヴィクトールの兄ヴォルターは、学者肌ではなく、成績も月並みであったが、建築方面への興味は断ちがたくて、ギムナジウムを中退している。家族によれば、彼は特にインテリアデザインが得意で、いっばしの芸術家だった。学校では早くから芝居にも打ち込んでいた。妹のステラは兄ヴォルターと同じく学問向きではなく、ファッション、特に婦人服の分野に興味を示した。ドレスのデッサンが上手で、水彩画で描くこともあった。フランクルが風刺漫画を巧みに描いたことを考えると、この一家には芸術的な血が流れていたのだろう⁽¹⁷⁾。だが、ギムナジウムに入ってさらに高じた、燃え上がるような知的探究心は彼だけのもので、その点は兄妹と全然違っていた。

1916年の秋、11歳のヴィッキーはシュベル・ギムナジウムに入学した。ときどき遅刻したり物思いにふけったりすることを除けば、彼はいい生徒だった。だがその興味は、学校では要求されていない分野に最も強く向けられていた。一度などは、日常生活の物理学——台所の物理学に関する本を買うお金を、両親にせがんだことがある。また、ゲーテの本を買いたいと、道の真ん中で言い張ったこともある。ところが、教師がその本を読む宿題を出すと、彼のゲーテ

に対する興味はたちまちしぼんでしまった⁽¹⁸⁾。この少年が好きなことに対して発揮するめざましい集中力をもって学んだ内容は、教師たちの評価の対象とはならなかった。

フランクル一家の絆は固かったが、5人には多くの共通点ばかりではなく、多くの相違点もあった。ヴォルターは背が伸び、骨格もしっかりしていて、いちばん年少のステラは大柄の部類に属していた。対してヴィクトールは小柄である。そのためだろうが、取っ組み合いのけんかであつた一度だけヴォルターに勝つた話を誇らしげに話した⁽¹⁹⁾。3人とも天性のスポーツマンではなかった。それでもステラはダンスに親しんでいたし、折にふれて野外に出るのを好んだ。ヴィクトールは激しいスポーツなど、からきし駄目だった。また小柄だけではなくきゃしゃで弱かった。特に細い足が両親の心配の種で、一家の家庭医はヴィッキーがサッカーをするのを厳しく禁じた。——もっともヴィクトールにとって、その制限はさほどの苦痛ではなかった。後年、アルプスの絶壁を登攀する喜びを知ってからは、彼は身体上のハンディを自分でまったく意識しなくなった。ロッククライミングは、80歳になるまでフランクルの情熱の対象だった⁽²⁰⁾。

ヴォルターとステラは成長するにつれて、母親のエルザと似てきた。母親エルザは優しい愛情の持ち主でみんなを包み込んだ。そして、自分の感情は開けっぴろげに表現した。フランクルは自分の母親を、子どもの心をもち、信心深く、人間的な温かさに満ちた人だったと語っている。しかし、ヴィクトールは父親との共通点が多く、痩せてまっすぐな骨格も似ていた。少年期を過ぎると、気質の上でも父親に似てきた。毅然として自制がきいて、スキンシップよりは忠誠心や節操という形で愛情を表現する。父と息子は、お金と時間に対して用心深く、質実剛健だった。二人とも宗教は個人的な問題だと考

えていたので、狂言的になったり、押しつけがましい態度をとったりすることはなかった。けれども、ガブリエルの信仰は心に深く根ざしていたので、彼は人生に確信と希望をもって向き合うことができた。フランクルは自分に備わっている「根っからの楽観性⁽⁸⁾」に感謝しており、そのように「パパ」に似ていることを心から誇りに思っていた。フランクルは両親の愛情を一身に受けたことが彼の人間性に大きく影響を及ぼしたといえる。母親譲りの優しさと父親譲りの厳しいまでの正義感が、彼ほど両極端な性格を持ち合わせている者も珍しいといわれたことがあったらしい⁽²¹⁾。

ヴィクトールとステラが兄妹だということは、身内の間でも信じられないくらい外形や性格が違っていた。ステラはブロンドで青い目、がっちりした体躯、それにひきかえ、ヴィクトールは髪の色も濃く、きゃしゃで弱々しかった。ステラは社交的で、近所に知り合いも多く、おしゃべりが好きだった。それに対して、フランクルはちょっとしたおしゃべりも嫌がって、知り合いであれ、見知らぬ人であれ、社交場の会話というものが我慢ならなかった——彼が好んだのは、ギムナジウムの頃から、論理的で打てば響くようなギブ・アンド・テイクの対話だった。香水でもなんでも、ステラのちょっとした関心事がくだらないと感じたとたん、フランクルは、彼女が我慢できなくなることがあった。彼女は頭が回らないわけではないのだが、知的な好奇心というものが欠如していた。あまり本をも読まなかったし、後年、兄のヴィクトールが書いた本すら手に取らなかった。

一見するとステラは母親似で、ヴィクトールは父親似だが、ひとたび逆境に陥ると、二人とも父親譲りのストイックな気質を発揮して、落ち着きと勇気をもって襲ってくる運命と対決した。兄ヴォルターを先に亡くしていたが、いつまでも感傷にひたることなく、陽気さを失わな

かった。彼らはよくジョークを飛ばしていた。家族は、つねに陽気でユーモラスだった。

「ブラーター」はフランクルの少年期全体にわたって重要な意味をもつ。子どもの頃のフランクルは、ブラーターの遊歩道を歩きながら、たくさんの人の役に立つ本を書く将来の自分を想像した。だが、彼はそれで有名になる気はさらさらなかった。

10代になると、フランクルは頻繁に一人でブラーターへ行くようになった。まれに学校の友達と一緒にいるときは、スポーツやただぶらぶら歩き回るためではなく、偉大な思想家や新しい思想について討論するのが目的であった。フランクルを駆り立てたものは何だったのか、どのような思想が彼を魅了したのであろうか。

医学に惹かれる気持ちは依然として強かったが、自分が取り組んでいるのと同じ問題と格闘している哲学者がいるのを知ったとき、フランクルの前に新しい世界が開けた。

家庭の庇護のおかげで、彼は自分の興味を追いかけることができた。同世代の少年たちが夢中になるようなことをする機会こそ逃したが、哲学と新しい心理学の関係性についてあれこれ考えている彼には、それが気にならなかった。自分で本を読んだり、公開講座に出席したり、大都市の中で沸々とたぎる様々な思想を通して、彼の関心は学校では学ぶことのできない心理学に向けられていた。フランクルの生涯は、彼が育った時代の教育を抜きにしては語れない。ちょうど批判力が培われる時期に、フランクルは、ある種の哲学者と科学者の否定的で悲観的なビジョンに圧倒された。彼らの視点は、現実に行われている戦争により実証されていると思えた。

フランクルが13歳のある日、生物の教師が生徒たちの間を歩き回りながら講義し、当時のシニシズムを反映するような発言をした。「詰まるところ、人生は燃焼プロセス、酸化プロセス

以上の何ものでもない」。フランクは即座に立ち上がり、その教師に質問をぶつけた。「先生、ほんとうにそうなら、人生の意味はどこにあるのですか？」⁽²²⁾ 教師は答えられなかった。自分が言ったことをほんとうに信じていたからかもしれない。この出来事からも、フランクがすでに人生は「それ以上の何ものでもない」という考え方に闘っていた。自分と異なる立場に猛然と向かっていく姿勢は、すでに早くから見られたのである。

本を読み、講義を聴くほどに、ますます疑問が湧いてくる。人生の意味に関する問いに追いまくられ、いつ終わるとも知れぬ戦争の間、信仰の喪失と伝統的な価値の揺らぎに対する恐れは、彼の天性の楽観主義をしばしば奪い取ってしまった。

フランクがすでに13歳で哲学の探求を始め、1918年に終戦を体験し、15歳になった1920年には、自分の方法で哲学的に思索していたのは驚異に値する。

この頃、フランクはフロイト教授と文通を始めた。精神分析に夢中だったフランクは、すっかりフロイト教信者になっていた。フロイトとの文通は数年間も続いた⁽²³⁾。17歳のとき、フランクは学校に提出する論文を書くためにプラーターへ行った。そのときもやはり自分の興味の赴くままに、「模擬肯定と否定について」と題する論文を書いたのだが、これを見ると、彼がすでに精神分析をほとんど自分のものに行っているのが明らかである。彼は、フロイトがこの論文に興味を示すだろうと考え、写しを彼に送った。フロイトの返事を手にしたときは、フランクも驚いた。彼は「論文を『国際精神分析ジャーナル』に送っておきました。あなたが反対でなければいいのですが」⁽²⁴⁾ と。この記事は2年後に掲載された。それはフランクがシュベル・ギムナジウムを卒業した1924年のことだったが、卒業時の論文にも彼の精神分析へ

の傾倒がはっきりうかがわれる。

フロイトに入れ込む一方で、フランクの生涯にわたる実存主義との関わりもこの頃に始まっている。

ギムナジウムを卒業する頃のフランクは、実存主義者のあいだで広まっていたニヒリズムによって疲弊していたばかりでなく、あれほど入れ込んでいた精神分析についても方向性を見失った状態だった。彼には、ニヒリズムが人間の本性の考察と特殊な方法で結びついているのがわかってきた。人間であることは、私たちがどう人生を理解するか、どう行動するか、そして究極的にはどのように互いを扱うかと関係している。彼は徐々に、私たちは他の誰でもなく私たちとならしめるのは、人間の精神なのだという確信を強めていった⁽²⁵⁾。ところが、還元主義者たちは、人生と人間の本性を「ただ～にすぎない」と単純化し、精神というものを否定し、無視し、あるいは軽視している。

その他の哲学者や教師のおかげで、フランクはタイミングよくニヒリズムの危機から脱出できた。耳にしたり読んだりしたことを鵜呑みにせず、自分の信念を鍛えていったのである。

第3節 青年期のフランク

1924年の夏は、フランクにとって変化のときだった。マトゥラー（高校卒業資格試験）でよい成績をあげてギムナジウムを卒業し、ウィーン大学の医学部に入学した。

医者になりたいという彼の幼いころの職業の夢が、精神分析の影響によって精神科医になりたいという希望にまとまってきたのは中学生のころであった。しかし、医学部に在籍にも専攻の選択に迷いがあったが、ある友人の言葉により、「精神医学的自己実現」からもう逃げまいと固く決心したのである⁽²⁶⁾。

フランク一家は敬虔なユダヤ教徒で、フランク自身はギムナジウムの学生時代、短期間

だがオーストリア社会民主主義労働者青年団のスポークスマンを務めた。社会主義の政治綱領は、アドラーの理念にぴったりだった。精神分析から距離を保つようになったフランクルがアドラー派の虜になったのは、フロイト派にはなかった社会的要素に惹かれたのが大きい。アドラー派は、ウィーンばかりではなく、方々に児童相談所を設立した。アドラーはきわめて実践的で、子どもや青少年の問題に熱心に関わり、教育制度の欠陥を是正するために闘った。彼はできるだけ多くの人に心理相談を行えるよう、現実的な方法を模索したのである。フランクル自身のその後の歩みは、アドラー派の実用主義と地域住民に対する広い関心に影響を受けている面がある。

だが、フランクルがアドラー陣営に鞍替えしたことを説明するには、社会主義の綱領との関連だけでは不十分である。彼の精神分析に対する確信が揺らぐ中で、アドラーの個人心理学は、新分野である心理療法における唯一の具体的な選択肢だったのである。アドラーはフランクルに直接的・個人的な影響を与えた。

医学部に入学してすぐ、フランクルの名は市民の間でも知られるようになった。20歳のときに、「心理療法と世界観——両者の関係の批判的論考」という短い記事がアドラー派の専門雑誌に掲載された。しかも注目すべきことに、そこには意味、価値、超越性に関する彼独自の考察がすでに読み取れる⁽²⁷⁾。

フランクルは、青年社会主義運動やアドラー派の児童相談所に関わり、フーゴ・ルカーチとエルヴィン・ヴェクスベルクの指導のもとで個人心理学を学んでいたの、すでに21歳で性、自殺、人生における意味について講演し、外国にも出かけていた。プラハではオットー・ベズル教授⁽²⁸⁾と会った。ベズルはその後もフランクルの人生に重要な役割を果たすことになる。

フランクルに決定的な影響を与えた人物は、

フーゴ・ルカーチ一人ではない。医者にして哲学者であるルドルフ・アラーズとオズヴァルト・シュヴァルツもフランクルに影響を与え尊敬する師となった。1925年から26年、フランクルはアラーズの生理学研究室で助手を務めた。シュヴァルツはポリクリニックの泌尿器科の医師で、身心医学の創始者の一人でもあった。アラーズとシュヴァルツの二人は、個人心理学協会の集會に定期的に出席していた。しかし、アラーズとシュヴァルツの両名が、特定の考え方を強要するアドラーに挑戦的な態度をとり、個人心理学協会から二人は離脱し、アドラーは立腹する。フランクルも、アドラーの前で、全面的ではないにせよ、アラーズとシュヴァルツの肩をもったから、アドラーの怒りは爆発した。

フランクルにとってのこの時代は、多くの偉大な人物の影響を受けた。フロイト、アドラー、フーゴ・ルカーチ、アラーズ、シュヴァルツ、オットー・ベズル教授……。特にアドラーの社会的献身が一種の手本としてフランクルによる影響を与えた。アドラーの児童相談所が、のちにフランクルが打ち込んだ自殺防止運動のモデルとなっているのは、疑いの余地はない。

しかし、話を、フランクルが15、6歳の頃に戻らなければならない。それは彼が生み出したロゴセラピーの始まりでもあったからである。フランクルは15、6歳の頃から哲学の勉強も始め、高校の卒業論文として「哲学的思考の心理学について」を書いた。この論文は、まだ精神分析の心理学主義に影響されたものであったが、それでも少なくとも「病的」イコール「誤り」と頭から決めつけることはやめるようになっていた。この「心理学主義的誘惑」に、さらにアドラーによる「社会学主義的誘惑」が加わったのである⁽²⁹⁾。

アドラーが彼の雑誌で提起したテーマのうち、フランクルはどんなテーマに関心を抱いたのか。彼の研究全体を貫くいわば赤い糸とは、

「特に精神療法における意味と価値の問題に重点をおいた、精神療法と哲学の間の境界領域の解明」というテーマであった⁽³⁰⁾。この問題に生涯をかけて取り組んだ者はフランクを除いて外にいない。

1920年代、フランクは“医学心理学学術協会”を設立し、自らも副会長に選出された。1926年に講演し、公の学会で初めて「ロゴセラピー」について話した。彼がもう一つの名称である「実存分析」という用語を用いたのは1933年が最初である。この頃には、フランクの思考は、ある程度まで体系化されていた。

すでにフランクは、1929年に、三つの価値グループもしくは人生—その後の瞬間、最後の息を引き取るまでの—から意味を獲得する三つの可能性について考えていた。人生から意味を獲得するこの三つの可能性とは、第一に、われわれが行う活動やわれわれが創造する作品であり、第二に、体験・出会い・愛である。そして第三に、われわれが変えようのない運命（不治の病とか手術不可能な癌）に直面したときですら、人間の能力のうちで最も人間的な能力である、苦悩を人間的な業績に変容するという能力を証明することによって、人生から意味を闘いとることができるのである。フランクは、フロイトやアドラーというウィーン精神療法の最初の二つの学派を自ら通り抜けて、精神療法のウィーン第三学派を打ち立てたのである。彼らとともに精神療法の発展に参加してきたとも、また同時に両者を取捨していたともいえるのであろう。

1937年、フランクは精神・神経科の専門医として開業したが、専門医として支障なく開業を続けることは難しかった。その理由は開業して数ヶ月後の1938年3月11日、ヒットラーの軍隊がオーストリアに侵攻して来たからである。まさしく、この日からすべてが変化したのである。

ウィーンの心理療法を担う三人の運命は、ヒットラーにより大きく左右された。自然な理由によりアドラーは講演先のスコットランドで心臓発作のため亡くなり、不自然な理由によってフロイトはイギリスに渡り、癌のため自分の人生に折り合いをつけ安楽死した。フランクもアメリカに亡命できたが、両親をウィーンに残して行く決心がつかず、ウィーンに残った。この大きな運命の岐路をフランクは知る術もなかった。また、そうなるべく宇宙の力によって導かれたのである⁽³¹⁾。

すでに人生の究極の意味を確信していたフランクは、ゲシュタポの監視下にあった最中でさえ、人間としてどうすべきかを熟知していたから毅然とした態度をとることができたのである。

この時期にフランクは、自分の父親のような年齢のオットー・ペズル教授とひそかに協力し—ペズルがナチ党員だったにもかかわらず—、精神障害のユダヤ人患者をナチの安楽死計画から救い出した。フランクがユダヤ人患者を守るにあたり、ペズルの力とコネは大いにものを言った。ペズルはフランクが要請すると、ロートシルト病院にも出向いてくれた。ナチの計画を故意にサボタージュしてユダヤ人を救うために自分の命を危険にさらしたのはペズル自身の意思だった。フランクは自分の師に対する信頼の念をますます強くした⁽³²⁾。

第4節 強制収容所でのフランク

フランクはユダヤ人というだけで、ナチ親衛隊により強制収容所送りになった。最初の収容所はテレージエンシュタットだった。バラックでは、プラハで名の通ったジャズバンドが演奏されていた。筆舌に尽くしがたい拷問と夜のジャズが織りなすコントラストは、美と醜、人間性と非人間性といったあらゆる矛盾をもつ、われわれ人間の実存の姿を典型的に示すもので

あった。テレージエンシュタットでのフランクルは仕事を与えられていた。彼は被収容者の精神衛生に関する職務に加え、ウィーンでの経験と独自のロゴセラピーのアプローチを生かして、自殺の問題にも取り組んだ。ゲットー内で自殺防止チームを組織して活動を開始したのである。

その2年後、ナチ親衛隊は、ユダヤ人たちをチェスの駒のようにあちこちに移動させた。フランクル39歳のとき、アウシュヴィッツで最初の選別に遭遇した（アウシュヴィッツに到着してすぐメンゲレ博士が指を右か左に動かして、生き延びられる方とガス室に送られる方とを選別していた。フランクルは生き延びられる方ではなかった。しかし、メンゲレ博士の背後に回って生き延びられる方に回った）。なぜフランクルがそのようなことができたのか、不思議でならないと後年、述懐している。自分では到底考えつくこともできないことが何かの力によってそうさせられたのであったから、自分でも不思議でならなかったのであろう。彼にとって、どうしてそのようなことを思いついたのか、またそのような勇気や度胸はどこから出たのか、不思議でならなかった。フランクルが生き延びて彼のロゴセラピーを確立し、人々を助けなければならないという責任と義務からか、個人の力ではどうすることもできない「宇宙の力」「神」が彼の存在を必要としたからか、彼は生き延びたのである。自己の内なる力を信頼して、それにまかせるとき、偉大な力、行動に出られるものである⁽³³⁾。

また、「偶然」についてもどう解釈をすればよいのかということもあった。同じ場所で、ベルトと眼鏡を除き、着ている物をすべて脱ぐように命令され、裏地に『死と愛』の原稿を縫いつけたコートも没収された。そして、自分の服の代わりにガス室送りになった被収容者のぼろ服を与えられたのだが、そのポケットには引き

ちぎられたヘブライ語で書かれた祈祷書の1ページが入っていた。それには、ユダヤ人にとっては一番重要な祈り「汝のすべての心と、すべての魂と、すべての力をもって汝の神を愛せよ」と書かれていた。これによって、原稿が出版できるかどうかより、どんなことに直面しようとも人生に対して「イエス」と答え、自分の考えを生きていこうとフランクルは決意したのである⁽³⁴⁾。

また、最初の収容所で30ヶ所以上の傷を負ったとき、一人のチンピラやくぎに引きずられながらゲットーに戻されたが、そのときの彼が「監視員」となっていたアウシュヴィッツで、彼のおかげでフランクルの命が救われたと確信できる出来事が起こった⁽³⁵⁾。しかし、それもただの偶然とはいえない。「神」「宇宙の力」によるものだとフランクルは確信している。これらのことからわかるように、「宇宙」や「自然界」そして「神」とわれわれは繋がっているといえるのではないか。それがフランクルのいう「超意味」である⁽³⁶⁾。

フランクルが、このような凄まじい経験の中で生き残って生還できたというのは、「生きる目標」「希望」をもっていたからである。それは、フランクルのいう「生きる意味」であり、また自己超越——すなわち人間存在が自分自身を越えて、もはや自分ではない何ものかに達すること——を意味する。他の条件が同じならば未来に向かって方向づけられている人々、つまり将来果たすべき意味によって待たれている人々のほうが容易に生き延びることができるのである。あの過酷な極限状態の中でさえも「希望」や「生きる意志」さえあれば、ナチス強制収容所という、人類史上かつてない最低最悪の地獄においても生き延びられる。こうして、フランクルは、生存のために意味は必要であるが、それだけでは十分でないと考えようになった。つまり、幸運、運命の巡り合わせ、神の摂理といった要

因が重要な役目を果たし、私たちが直接的に影響を及ぼすことができないような偶然的要素に働きかけるのである。「意味への意志」を「超意味」が味方してくれるのではないだろうか。われわれは人生に期待するのは間違っている。人生の方がわれわれに期待しているのである⁽³⁶⁾。

第2章 意味への意志

強制収容所でフランクルがつかんだものは多い。それはフランクルの人間の究極の本質である証明であった。人間には、極限の世界においても失われない気高さがある。人間は、単に性的快楽を追求する「快楽への意志」(フロイト)や劣等感の補償(優越欲)を追求する「力への意志」(アドラー)によって衝動的に駆り立てられるだけの存在ではなく、自己の意味を希求する「意味への意志」によって魂を吹き込まれた存在である。

たしかに、人間には性衝動に支配される面もあれば、権力衝動に支配される面もあることをフランクルは認めている。しかし、彼は一面的な自説だけをもってきて、それが人間存在のすべてであるかのように決めつけることに対して批判した。それらは真実でないことをフランクルはあの強制収容所の体験をもって証明するのである。

人間の精神は、どんな逆境に直面してもめげないものである。本来、人間はそうしたものであるが、それに気づくか、気づかないかの違いによるのであるとフランクルは自らの経験をもって語るのである。

人間とは平面的な存在ではなく、立体的な存在である。立体が、平面上にその本質を現すことができないように、人間の本質も、平面上、つまり物質的次元には、完全にその姿を現すことはできない。フランクルによれば、人間の本質とは、物質的次元を超えた「精神」である。

平面である物質的次元に存在している肉体とその心は、精神の道具である。「心的物理的有機体」にすぎない⁽³⁷⁾。

われわれ人間は、意識的にせよ無意識的にせよ、つねに生きがいを求めて生きている。人生の意味や価値を求めることは、人間固有のきわめて人間的な問いである。フランクルは次のように述べている⁽³⁸⁾。

生命(人生)に意味に関する問いは、たとえそれが述べられなくても、あるいは不明瞭にしか言われなくても、本来的に人間的な問いという特色を持っているのである。したがって生命の意味を問題にするということは、それ自身では決して人間における病的なもの、あるいはかたよったものの表現ではない。それはむしろ人間存在の本来の表現そのものであり、まさに人間における最も人間的なものの表現なのである。なぜならば、たしかにわれわれは、たとえば蜂蜜や蟻のような人間の国家組織にも似た、また或る意味では人間の社会を凌駕すらしているような高度の社会的組織をもった生物を考えることはできるが、しかし或る生物が彼自身の存在の意味に関する問いを提出し、そしてこの彼自身の存在を問題視するというのをわれわれは決して想像することはできないからである。言語能力や概念思考あるいは直立歩行よりも、その存在の意味を問うというこの契機こそ人間と動物との本質的な相違の基準として一層重要なのである。

このように人間とは「人生の意味」を問う存在なのである。ここに人間が他の動物から区別される人間の本質的特徴がある。フランクルによれば、人間の最も根本的な意志、最も根本的な欲求は、「自分の人生をできる限り意味で満たしたい」という「意味への意志」であるという⁽³⁹⁾ これを確信し、そして実証したものが、フランクルの強制収容所の体験であった。ナチスの強制収容所という「極限状況」において人

間最後のところで支えたものが「意味への意志」であった⁽⁴⁰⁾。

強制収容所における人間を緊張せしめようとするには、先ず未来の或る目的に向かって緊張せしめることを前提とするのである。囚人に対するあらゆる心理治療的あるいは精神衛生的の努力が従うべき標語としては、おそらくニーチェの「何故生きるかを知っている者は、殆どあらゆる如何に生きるか、に耐えるのだ。」という言葉が最も適切であろう。すなわち囚人が現在の生活の恐ろしい「如何に」(状態)に、つまり収容所生活のすさまじさに、内的に抵抗し身を維持するためには何らかの機会がある限り囚人にその生きるための「何故」をすなわち生活目的を意識せしめねばならないのである。

反対に何の生活目標をもはや眼前に見ず、何の生活内容ももたず、その生活において何の目的も認めない人は哀れである。彼の存在の意味は彼から消えてしまうのである。そして同時に頑張り通す何らの意義もなくなってしまうのである。このようにして全く拠り所を失った人々はやがて仆れて行くのである。あらゆる励ましの言葉に反対し、あらゆる慰めを拒絶する彼等の典型的な口のきき方は、普通次のようであった。「私はもはや人生から期待すべき何のものも持っていないのだ。」

このように、人間を他の動物から区別する人間の本質が人生の意味を問うことにあり、またこの人生の意味を求める欲求が人間の他のあらゆる欲求よりも根本的な欲求であるとするならば、この欲求が満たされなければ、人間にとって最も根本的な欲求不満であり、深刻な苦悩になるであろう。この収容所の囚人の「私はもはや人生から期待すべき何も持っていないのだ」という叫びは、この人間の苦悩の表明である。

しかし、これに対してフランクルはこう述べている⁽⁴¹⁾。

ここで必要なのは生命の意味についても問い

の観点変更なのである。すなわち人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである。哲学的に誇張して言えば、ここではコペルニクス的転回が問題なのであると言えよう。すなわち、われわれが人生の意味を問うのではなくて、われわれ自身が問われた者として体験されるのである。人生はわれわれに毎日毎日問いを提出し、われわれはその問いに、詮索や口先ではなくて、正しい行為によって応答しなければならないのである。人生の意味の問題に正しく答えること、人生が各人に課する使命を果たすこと、日々の務めを行うことに対する責任を担うことに他ならないのである。

われわれは生きがいの問題を考える際、もう一方で「死の問題」にぶち当たる。しかし、生きる意味を理解し、如何に生きるかを理解できる者は「死」をも受け入れられるのである。つまり、毎日毎日、与えられた日々を正しい行為によって答え、また責任をもって答えることにより、自らの人生(生命)を自分のものにすることができるからである。本当に自分でよく生きることは、おのずから死の問題を呑み込むことができるのである。明治の俳人正岡子規(1867-1902)は脊椎カリエスで長く伏し、苦痛に耐えて綴った中に、「悟り」をめぐる一節がある。悟りとは、いつでも平気で死ぬことだと思っていたのは誤解だった、逆に如何なる場合にも平気で生きていることである、と⁽⁴²⁾。

フランクルは、生きる意味さえ理解することができれば、如何なる苦悩にも耐え得ることができるというのである。あの極限の世界で、生きているといえない世界でさえ彼はその意味を知ったからこそ生還できたのである。それをフランクルは、あの凄まじい強制収容所の中で自身をもって証明したのである。

そもそも意味というものは他人から与えられ

ることはできない。しかし、どうすれば意味が見つかるのか、どうすれば人生が意味で満たされるのか、とっくの昔に分かっているのである。まず第一に、何らかの行動をとること、また何らかの作品を作り出すことによって、つまり創造によって、人生は意味で満たされる。第二に、何らかの体験によっても人生は意味で満たされるのである。その何かは物、または者(人)であるかも知れない。完全に一回的で唯一の人として体験することが、その人を愛することである。人生は無条件に意味をもち、人生はどこまでも意味がある。どのような条件、どのような状況の下でも人生には意味がある。なぜそういえるか。それは変えようのない事実と直面するとき、いや、変えようのない事実と直面するときこそ、その状況に耐えることによって、自分が人間であると示すことができ、人間にどんなことができるかを証明することができるのである。そのとき重要なのは、避けることのできない人生の運命的な打撃をどのような態度で、どのような姿勢で受け止めるか、である。したがって、人間は、最後の最後、息を引き取るそのときまで、生きる意味を勝ち取って我がものにするのできるのである⁽⁴³⁾。

フランクフルは、人生の価値として、三つの価値を挙げている。つまり、最初の価値は「創造価値」である。これは創造ないし活動の中において実現化される。二つ目の価値は「体験価値」である。これは体験によって実現化されるのである。

しかし、フランクフルはいう。「創造価値」によって実ることが豊かでなく、また「体験価値」においても豊かなものにできなくとも、まだ、最後の根本的な有意味があるのだ、と。それは、人間が生命の制限に対して如何なる態度をとるかということの中で実現化される第三の価値群である。それを彼は「態度価値」と呼ぶ⁽⁴⁴⁾。

人間が変えることのできない運命に対してわ

れわれは如何なる態度をとるかということが問題なのである。

おわりに

フランクフルがああ壮絶な体験を通して証明した、人間として最も価値ある態度は「態度価値」にある。たとえば、フロイトの「快楽への意志」を体験価値、また、アドラーの「力への意志」を創造価値に(これについては多様に現れると思われる。人間が何をもち「力」と考えるかに応じて、無限にある。しかし、ここでは人間のあらゆる活動領域と考える)、最後のフランクフルの「意味への意志」を態度価値に関連づけて捉えるなら、「意味への意志」こそ、つまり態度価値であり、それ以外の何ものでもない。解放されて自由になったある囚人がいった言葉がその意味を示している。「ナチスのあの苛酷な強制収容所にいたときは充足していた」⁽⁴⁵⁾と。

将来に向かって、しかも将来の具体的な課題に向かって方向づけられている人たちこそ、生き延びる最大の可能性をもっていたことはフランクフル自身が身をもって知っているのである。つまり、何らかの意味に方向づけられている人間は、その意味に対して義務を負っている、そしてその意味に対しての責任さえ感じるのである。同じ状況下において比べれば、たしかにいえることは、意味に向かっていない人たちはそうでない人たちよりも生き延びる可能性ははるかに大きいのである。これが「意味への意志」なのである⁽⁴⁶⁾。

【注】

(1) トルストイ 米川正夫訳『イワン・イリッチの死』、岩波文庫、1973年。

自分は山へ登っているのだと思い込みながら、規則正しく坂を下っていたようなものだ。まったくそのとおり。世間の目から見ると、自分は

- 山に登っていた。ところが、ちょうどそれと同じ程度に生命が自分の足もとからのがれていたのだ……(中略)事によったら、おれの生き方は道にはずれていたのかもしれない?(89頁)今まで送ってきた生活が、掟にはずれた間違っただめだという疑念が、真実なのかもしれないのである。(中略)勤務も生活の営みも、家庭も、社交や勤務上の興味も一すべて間違っていたかもしれない。彼はこれらのものを自分自身にむかって弁護しようと試みた。しかし、とつぜん、自分の弁護しているものの脆弱さを痛切に感じた。それに、弁護すべきものすら何もなかった。(96頁)
- (2) ハドン・クリングバーグJr、赤坂桃子訳『人生があなたを待っている 1』みすず書房、2006年、15頁。
- (3) 文献:ハドン・クリングバーグJr、赤坂桃子訳『人生があなたを待っている 1』みすず書房、2006年、46-47&56頁。
V. E. フランクル 山田邦男訳『フランクル回想録』春秋社、1997年、14~17頁。
- (4) 1845年4月11日ブラハ生まれ。1925年9月19日テューブリッツで没。オーストリアの政治家。歴史的に価値の高い回顧録を残した。
- (5) 『人生があなたを待っている 1』、56頁&188頁。ここに見られるようにフランクルの父ガブリエルは信念を貫き通す正義感の持ち主である。しかし、見方を変えれば頑固者だと思われるかもしれない。(56頁)。
- (6) V. E. フランクル 山田邦男訳『フランクル回想録』、19頁。
- (7) 1873年3月4日生まれ。収容所移送1994年4月20日。叙情詩人、小説家、文芸ジャーナリスト、編集者(『古いブラハの覗き箱』)。
- (8) 1968年1月19日生まれ。1932年12月4日シュタルンベルグにて没。オーストリアの作家、『ジンプリチスムス』(ドイツの政治風刺雑誌)の寄稿家。E・T・A・ホフマンとE・A・ポールを継承した幻想小説の著者。代表作に『ゴーレム』(ユダヤの粘土人形)(1915年)がある。
- (9) 1040年トロア(フランス)生まれ。1105年同地で没。本名はサロモ・ベン・イサーク。聖書とタルムードを解釈をしたユダヤ人。特に聖書とタルムードの記録に使われたヘブライ語の平方書きの書体であるラシッド文字は、彼の名前に由来する。
- (10) マハラールは「マ・ハ・ラール」で、民衆から「偉大なラビ」と呼ばれたラビ・レーヴ(イエフダ・ベン・ベザゼル・ルーヴ)の公式称号である。“Morenu H-rab Rabbenu”のヘブライ語文献用の略号。「我が師、我がラビ、レーヴ」というような意味。
- (11) 『人生があなたを待っている 1』、47頁。
- (12) 同上、47頁。
- (13) 同上、47~48頁。
- (14) 同上、49頁。
- (15) 『フランクル回想録』、25頁。
- (16) 同上、26頁。
- (17) 同上、55頁&155頁。
『人生があなたを待っている 1』、69~70頁。
- (18) 『人生があなたを待っている 1』、70頁。
- (19) 同上、71頁。
- (20) 『フランクル回想録』、42頁。
- (21) 同上、15頁。
- (22) 『人生があなたを待っている 1』、78頁。
- (23) 同上、80頁。
- (24) 同上、80頁。
- (25) 同上、83頁。
- (26) 『フランクル回想録』、62頁。
- (27) 『人生があなたを待っている 1』、97~98頁。
- (28) 同上、99頁。
- (29) 『フランクル回想録』、72~73頁。
- (30) 同上、73頁。
- (31) 『人生があなたを待っている 1』、162~163頁。
- (32) 『フランクル回想録』、87頁。
- (33) 齊藤啓一 『フランクルに学ぶ』、日本教文社、2000年、7頁。
- (34) 『人生があなたを待っている 1』、206頁。
- (35) 山田邦男編 『生きる意味への問い』、佼成出版社、1998年、290頁。
- (36) 齊藤啓一、前掲書、7~9頁。
『人生があなたを待っている 1』、226頁。
- (37) V. E. フランクル 山田邦男監訳『意味への意志』、春秋社、2002年、218~221頁。
- (38) V. E. フランクル 霜山徳爾訳『死と愛』、みすず書房、1957年、33頁。
- (39) 山田邦男編、前掲書、2~3頁。
- (40) V. E. フランクル 霜山徳爾訳『夜と霧』、みすず書房、1961年、182頁。
強制収容所における人間を内的に緊張せしめようとするには、先ず未来のある目的に向かって緊張せしめることを前提にするのである。囚人に対するあらゆる心理療法的あるいは精神衛生的努力が従うべき標語としては、おそらくニー

チェの「何故生きるかを知っている者は、殆どあらゆる如何に生きるか、に耐えるのだ」という言葉がもっとも適切であろう。すなわち囚人が現在の生活の恐ろしい「如何に」(状態)に、つまり、収容所生活のすさまじさに、内的に抵抗に身を維持するためには何らかの機会がある限り囚人にその生きるための「何故」をすなわち生活目的を意識せしめねばならないのである。V. E. フランクル 山田邦男・松田美佳訳『宿命を超えて、自己を超えて』、春秋社、96頁。

- (41) V. E. フランクル 霜山徳爾訳、前掲書、182～183頁。
(42) 『病床六尺』随筆 明治35年5月から新聞連載。
(43) 『宿命を超えて、自己を超えて』、153頁。
(44) 『死と愛』、53頁&120頁。
(45) 『夜と霧』、136頁。

強制収容所という極限の世界にも喜びがあり、また目的、希望に向かって耐え抜くことの意味を知った者は強靱な体躯を持った者より生き延びることができた。しかし、すべての現実を知ったとき、希望喪失感に悩まされた。いかに、意味への意志が「生」と一体しているかが分かる。『人生があなたを待っている 1』、226頁。

V. E. フランクル 山田邦男・松田美佳訳『それでも人生にイエスと言う』、春秋社、1993年、155頁。

- (46) 『宿命を超えて、自己を超えて』、96頁。